

「世の罪を取り除く神の小羊」

ヨハネによる福音書 1章29～34節

「ヨハネによる福音書」を初めから順を追って読み進めています。そのようにして、私たちの選り好みや思い込みを押し、聖書の語りかけに真つすぐ聴いていこうとしているわけですが、今回やっと、イエス・キリストの登場となりました。

今月の箇所は あらまし、次のような展開になっています。バプテスマのヨハネが、自分の方に近づいてこられるイエス様を認めます。そして、言います。29節、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ」。ヨハネは、水でバプテスマを授けるために遣わされました。しかし 32節、イエス・キリストの上に「`霊、が鳩のように天から降って・・・とどまるのを見」て、ヨハネはこう証しします。33節、34節、「わたしをお遣わしになった方が、『`霊、が降って・・・とどまるのを見たら、その人が、聖霊によって洗礼を授ける人である』と わたしに言われた。わたしはそれを見た。・・・この方〔イエス・キリスト〕こそ 神の子である」

あらましはこのとおりですが、そもそもこの出来事がどこで起こったかといえば、ヨハネが人々にバプテスマを授けていたヨルダン川のほとりと考えられます。「マタイ」「マルコ」「ルカ」の他の3つの福音書は、ヨルダン川でバプテスマを授けていたヨハネのもとを主イエスが訪れ、御自分からヨハネのバプテスマを受けられたと記しています。その描き方は多少異なるものの、記事自体はヨハネ福音書のそれと重なります。ヨハネの福音書も前回の最後のところで、バプテスマのヨハネがユダヤ当局に問い質されたのは「ヨハネが洗礼を授けていたヨルダン川の向こう側、ベタニアでの出来事であった」（ヨハネ 1：28）と書き留めています。本日の箇所は ヨハネがそのようにしてバプテスマを授けていたヨルダン川のほとりでの出来事であり、イエス・キリストが御自分からヨハネのバプテスマを受けられた その折の出来事と考えられます。本来 バプテスマなど受ける必要のない主イエスがなぜ バプテスマを受けられたのか。それは、私たちと全く同じ人間となり、私たちのすべてをその身に負うためでした。ヨハネによる福音書が冒頭から一貫して語る、その中心的なメッセージです。ただし、イエス・キリストのバプテスマについては、別の機会に譲ることにしましょう。今回は、バプテスマのヨハネの証言にこそ 目を注ぎたいと思います。一読してお分かりのとおり、ヨハネの証言は「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」との告白に凝縮されています。ポイントは、「世の罪」を「取り除く」「神の小羊」にあると言えるでしょう。「世の罪」の正体とはいったい、何なのか？「神の小羊」はそれを どうやって「取り除く」のか？ 聖書の語りかけが響きます。

わたしの心に・・・

早いものです。もう19年も前になりますが（1999年）、覚えておられるでしょうか。若山^{わかやま}春奈^{はるな}ちゃんという幼稚園児を主婦が殺害するという事件が起きました。その折、事件に関連し、『朝日新聞』の「天声人語」欄に 次のような一文が記されました。

「心は、二つの寝室のある家です。一方の部屋には苦しみが、一方には喜びが住んでいます」。作家カフカのことばである▼つぎのように言い換えることもできようか。「一方の部屋には善が、一方には悪が住んでいます」と。

皆さんはどう思われるでしょうか。文章はもちろん 事件との関連で記されたものの、問題の^{しん}真の所在は単に、私たち人間が社会的事件を引き起こすか否かではありません。もっと深いところで、「私たちは誰もが、人に見せられない内なる一面を持っている」ということだろうと思います。「人は誰しも、人目にさらしたくない 暗く^{よど}澱んだ部分を内に秘めている」ということです。外側を取り繕うことは それでも、何とかできるかもしれません。しかし、見える^{ぎょうじょう}行状を超えて 心の内まで問われる聖書の前に立つとき、私たちの誰が 内なるすべての扉を開き切れるでしょうか。

そんな私たちに向かって、バプテスマのヨハネが言います。31節、「わたしは、水で洗^{バプテスマ}礼を授けに来た」。それは何より、「悔い改め」のバプテスマでした。^{みづか}自らの内に潜む否定しがたい闇を 目を逸^そらさずに真っすぐ見詰め、暗く深いその深淵に目をやる。そして、その底に、神をないがしろにして 自分自身を神とする私たちの^{ごうまん}傲慢な思いが巣くっていることを認める。悔い改めとは、そのような傲慢から方向転換をし、身を低くして 神を見上げることにほかなりません。ヨハネは、その方向転換の告白のしるしとして、水でバプテスマを授けました。それは、内に巣くう罪を清め、新たな歩みへと押し出すものでした。私たちもまた、古い生き方を後ろにやり 新しい生き方に踏み出すため、水でバプテスマを受けます。

しかしながら、水のバプテスマに「いのち」を与え、私たちを「新たないのち」に生かすのは、人が行なう儀式としてのバプテスマそのものではありません。神様の下さる「上からの恵み」によります。だからこそ、自分の方へ来られるイエス・キリストを見て、ヨハネは言うのでした。「見よ、世の罪を取り除く 神の小羊」

「神の小羊」という呼び名は 実際、私たちが^{いだ}抱くイエス・キリストのイメージに いかにもピツタリの感がしないでしょうか。優しい、ソフトムードの神の子です。しかし、この呼び名の背後には、それだけでは済まない 歴史に根ざした深い意味合いが隠されてもいます。

一つは、ユダヤの神殿では毎日、朝と晩に「犠牲の供え物」として小羊が^{きさ}捧げられていたことです。それは、人の罪を^{ゆる}思い起こさせ、その赦しを神に求めるためのものでした。

一つは、イスラエルの人々が奴隷のエジプトを脱出した、あの「出エジプト」の出来事に関係していました。エジプト脱出の夜、イスラエルの人々は屠^{ほぶ}られた小羊の血を戸口の柱に塗りました。神の使いは血の印のあるそれらの家を過ぎ越^{ゆる}す一方、印のないエジプト人の家に不幸をもたらし、イス

ラエルの人々の脱出を成功に導いた、というものです。このため、この折の小羊は「過ぎ越しの小羊」と呼ばれます。それは、囚われと死からの解放を象徴するものでした。折しも、今回の出来事は、少し後の2章13節を見ると分かる通り、エジプト脱出を記念する「過ぎ越し祭」の近づく頃のことと、犠牲に捧げられる小羊の群れがヨルダン川のほとりを通り過ぎていったと思われま

す。一つは、旧約聖書のイザヤ書が記す、有名な「主の僕」「苦難の僕」の姿です。イザヤ書は53章で、こう語ります。「屠り場に引かれる小羊のように、毛を切る者の前に物を言わない羊のように、彼は口を開かなかつた」(イザヤ 53:7)。それは、「彼が私たちの病を担い、私たちの痛みを負ったからであり、私たちの背きのために刺し貫かれ、私たちの咎のために打ち砕かれたからだ」(同 53:4~5) と、イザヤはそう言います。そして、記します。「彼の受けた懲らしめによって、わたしたちに平和が与えられ、彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。・・・わたしたちの罪をすべて、主は彼に負わせられた」(同 53:5~6) と。それは、愛の神様の使いとして 私たちのすべてを身に負われた「主の僕」の姿でした。

また一つは、アブラハムが独り子イサクを捧げようとしたときの、旧約聖書の記事に関係していました。アブラハムはイサクを捧げるため、山に登ります。その途中、イサクが尋ねます。「火と薪はここにありますが、焼き尽くす献げ物にする小羊はどこにいるのですか」(創世記 22:7)。そのとき、アブラハムはこう答えるのでした。「わたしの子よ、焼き尽くす献げ物の小羊はきっと 神が備えてくださる」(同 22:8) と。そして、その言葉のとおり、最後の最後に 神は一匹の羊を用意し、イサクをアブラハムの胸に戻された、というものです。それは、真摯に御心を追い求める者に 神様御自身がなくてならぬものを備えてくださるという、そうした約束を意味するものとして 人々に受け止められてきました。

そして 最後に、新約聖書の終わりの書、「ヨハネの黙示録」に顕著な小羊の姿です。そこに見るのは 小羊から連想される柔和で優しい姿ではなく、力ある勝利者の姿です。ヨハネの黙示録は記します。「この後、わたしが見ていると・・・数えきれないほどの大群衆が、白い衣を身に着け、手になつめやしの枝を持ち、玉座の前と小羊の前に立って、大声でこう叫んだ。『救いは、玉座に座っておられるわたしたちの神と、小羊とのものである』」(黙示録 7:9~10)。それは、この世が理解しがたい 納得しがたい不条理や混乱で満ちていても、それでもなお 私たちには、最終的にすべてを御手に収めておられる方がいるという信仰の告白にほかなりません。

「神の小羊」という呼び名には、こうした幾つもの歴史的・信仰的な意味合いが隠されていました。バプテスマのヨハネがこれらのどれを意図して「神の小羊」と言ったのか、一つに断定するのは難しく思われます。ただ、そこには一つでない豊かな意味合いがあった。そして、少なくともヨハネの福音書の編著者らはその豊かさを知っていた。おそらく、そう考えてよいのではないのでしょうか。「イエス・キリストは私たちが罪の囚われから解き放つ 真の『過ぎ越しの小羊』であって、父なる神の御旨を担い、自ら進んで 私たちの罪を負って これを赦して下さった。イ

エス・キリストは、神様が送ってくださった『神の小羊』である。その恵みをただ、感謝して受けるがよい。この世の事柄は筋が通らず、理屈に合わぬことばかりかもしれない。だが、それらもすべて、神の御手の中にある。愛と義の御手の内に、救いの御手の内にある。その御手に信頼し、神の御心の成る時を祈り求めつつ、主イエスと共に確かな歩みを進めるがよい。記された言葉の向こうから、そんな招きの声が聞こえてはこないでしょうか。

今いるところから一段深いところへ、また一步高いところへ歩を進めるには、自分を超越する者に目をやるのが大切なことは 前回触れたとおりです。自分以上の者に出会うということです。けれども、実は それだけでは足りないとも言えます。本当は、大いなる者に出会えば 自然とそうなるはずですが、改めて言葉にしておくことも必要かもしれません。それは、「自分自身」と出会うということです。以前、亀井 鑛 という方が『朝日新聞』に次のような文章を寄せておられました。亀井さんは仏教徒（仏教評論家）ですが、会社の経営者で、かつ仏教新聞の編集も手がけられた方です。物事を誠実に、そして洞察力豊かに、鋭い感性を持って御覧になられる方のようです。こんな文章です。

「人間として生まれて一生の間に、どうしても出会わねばならぬ人が、一人いる。それは自分だ」という言葉を聞いたことがあります。三十数年、私の学んできた仏教の道は、このこと一つを呼びかけているとっていいと思います。「自己とは何ぞや。是れ人生の根本問題なり」と、明治の念仏の先覚、清沢 満之はいいます。人間の生き方を、親鸞は必須条件として、まず「自分自身を深く見つめる [こと]」といわれます。三十幾年の学びを通じ、及ばずながら私も、そのこと一つを学んでいるのです。

じゃあ、自分と出会うと、どういう自分が見えるのか。ある動物園で、「世界で一番恐ろしい生き物」と表示してある檻の前に立つと、そこに一枚の鏡が置いてあり、自分の姿が写るようになっていた、と聞いたことがあります。自分に出会うとは、世界中で一番恐ろしい生き物こそ自分だと気づかされる。仏道はまさにそれ。親鸞の語録「歎異抄」は、まさしく悪人の自覚を目覚め、悪人正機の書です。つまり、世界中で一番恐ろしい自分の自覚。実際に私自身、経営する会社の中で、わが家庭で、隣近所とのお付き合いで、また仏教を学ぶ仲間同士で、およそ手に負えない自分中心な、わがまま勝手な自分をゴリ押ししていながら、ケロリとしている、世にも恐ろしい自分に、しょっちゅう気づかされ詰めです。

私は三十年来、仏教新聞、雑誌をご縁に、百人、二百人の念仏者の生活体験を取材し、記録させていただいてきました。最初、開口一番、「仏法から何を学びましたか」と問うと、口をそろえて、「自分を見せてもらいました、自分を知らされました」と告白されます。美しい、見上げた自分でない、世界中で一番恐ろしい自分と出会わされるのです。私自身、仏法に出会ったころ、四面鏡の箱に入れられ、自らの醜い姿に脂汗を夕

ラーリタラリ流すガマの油だと実感もし、語ったものでした。

ちなみに、タイトルには「自分こそが一番恐ろしい存在」と付けられていました。筆者の亀井さんの誠実さと謙虚さが伝わる一文です。そもそも、宗教と呼ぶに値する真面目^{まじめ}で深い求道の道では、自ら^{みづか}を徹底して鋭く見詰める目を求められるのではないのでしょうか。心の底の底において裸の自分の偽らざる正体を目を逸らさず真つすぐに見つめることなしには、そこからの出口も、そこからの救いも外的な見当違いのものになってしまうからです。自分を超えた大いなる方に出会うとは、その出会いの場において自分自身と出会い、その本当の姿を見させられることでもあります。なぜなら、それなしには的を得た本来の生き方は開かれず、真実のいのちは生まれませんからです。それなしには私たちの抱える問題の根には届かず、本当の解決には至らないからです。根っこをどうにかしないかぎり、本当は何も始まらないのではないのでしょうか。問題は、そのようにして自分の正体を知って後、どこに光を探し、どこに出口を探り、どこに救いを求めるのかということです。すなわち、気休めでない、小手先の対症療法でもない、根本的な解決をどこに見出すのかということです。

バプテスマのヨハネは言います。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」。日本語では単数・複数の区別が付きませんが、ヨハネの福音書は実は、ここで「罪」という語を複数形でなく、単数形で記しているのです^{テーン ハマルティアーン ハマルティアー} (τὴν ἁμαρτίαν < ἁμαρτία, -ας, ἡ)。つまり、私たちが普通「悪さ」として言う「嘘をついた」「ごまかした」「人を傷つけた」などといった一つひとつのあれこれではなく、すべての根っこにある根本的な罪の性質を語るのです。それは、根っこのところで目の向けどころが違っているということです。新約聖書が書かれた原語のギリシア語では、「罪^{ハマルティアー} (ἁμαρτία, -ας, ἡ)」とはそもそも「的を外れ」を意味しました。「的が外れている」「見る方向が違う」「見当違いである」ということです。すなわち、「根っこのところで自分の方ばかり向いていて、神様の方を向いていない。自分を一番の神のように思い込んで、心を低くして神に謙虚に聴くことをしていない」というのです。聖書が指摘するのは、そうした的外れな自分であるかぎり、小手先の対症療法をどんなに施しても出口はなく、袋小路の迷路から抜けられないということです。どんな場合にも、聖書が何より問題にするのは、物事の根っこに潜む本質的な事柄です。

イエス・キリストは、私たちの内に潜むこの根源的な罪性を「取り除く」ために来てくださいました。「取り除く^{アイローン アイロー} (αἶρων < αἶρω)」というギリシア語は、裁判で「罪責を破棄する」ことをも意味しました。つまり、私たちの罪性を問責免除^{もんせきめんじょ}にし、責任をもはや問わないようにしてくださいました。イエス・キリストの十字架は、私たちの誰にも巣くう罪の本質が引き起こしたものです。主イエスは十字架の死を甘んじて受け、私たちのその罪性を赦^{ゆる}してくださいました。そして、私たちの罪責を破棄させ、免除してくださいました。私たちが愛するがゆえの、理屈を超えた生き様ではないのでしょうか。

こうして、バプテスマのヨハネは「世の罪を取り除く神の小羊」として、主イエスを指し示します。そして、そのうえで、こう続けるのです。33節、「水で洗^{バプテスマ}礼を授けるためにわたしをお遣わしになった方が、『霊^{くだ}が降って、ある人にとどまるのを見たら、その人が、聖霊に

よって洗バプテスマ礼を授ける人である』とわたしに言われた。ヨハネは、水でバプテスマを授けました。が、それは言ってみれば、「消極的なバプテスマ」とでも言うべきものでした。罪を悔い改め、赦ゆるしを頂き、清めてもらうためのもので、基本的には 罪の裁きから救い出してもらうだけのものだからです。しかし、イエス・キリストのバプテスマは、大事なところでそれ以上のものです。聖霊によるもので、新たないのちを生み出す「積極的なもの」と言えるでしょう。それは、神の御心みこころに響く心を私たちに与え、私たちの内に神の光を射し込ませます。しかも、御心を単なる知識としてだけ教えるのではなく、それを生きる力をも与えてくれます。汗を流しては 苦労しながら少しずつ少しずつ歩むその私たちに伴い立ってくださり、堅実な、本当の意味で豊かで深みのある信仰へと育ててくれます。私たちは主イエスのその約束があるからこそ、焦らず慌あわてず、意気消沈もせずに、安心して歩めるのではないのでしょうか。私たちが教会で行なうバプテスマも、形のうえではたしかに「水のバプテスマ」です。けれども それは、イエス・キリストへの信頼がある まさにそのところにおいて、復活の主イエスがそこに臨まれ 御自身の伴いでそこを包んでくださる、この約束の「聖霊のバプテスマ」でもあるのではないのでしょうか。復活のイエス・キリストがこの時もなお 生ける聖霊として臨まれ、私たちに伴い立ってくださるからです。私たちの希望は、この上よりの恵みにこそあるのではないのでしょうか。

バプテスマのヨハネは、主イエスの上に神の霊とどが留まるのを見ました。このとき ヨハネにとって、旧約聖書の啓示を通して出会っていたメシアが具体的な顔を持ちました。ヨハネは、現実には「知らなかった」(31、33) 救い主まにじかに見え、今、その姿を目にしたのです。

罪の問題は、誰しも 正面から向き合いたくない、できれば避けて通りたい問題です。人は大人おとなになればなるほど、自分の問題からは目を逸そらし、他人のあれこればかりをあげつらうようになるのではないのでしょうか。年を重ねるとは、正直で素直になることではなく、じょうずずるで狡くなることなのかもしれない。自分自身の心の内を覗のぞき見るとき、そう思わされてなりません。実際、小さな子どものほうが自分をごまかさず、内なる闇を真っすぐ直視するとも言えます。ここに、一つの詩があります。「チューインガム一つ」という、小学校3年生の詩です。その感じ取る心の正直さ、深さ、鋭さに感心させられます。こんな詩です。

「チューインガム一つ」

三年 村井 安子むらい やすこ

せんせい おこらんとって
せんせい おこらんとってね
わたし ものすごくわるいことした

わたし おみせやさんの
チューインガムとってん

一年生の子とふたりで
チューインガムとってももてん
すぐみつかったしてもた
きっと かみさんが
おばさんにしらせたんや
わたし ものもいわれへん
からだがおもちゃみたいに
カタカタふるえるねん

わたしが一年生の子に
「とり」いうてん
一年生の子が
「あんたもとり」いうたけど
わたしはみつかったらいややから
いややいうた

一年生の子がとった
でも わたしがわるい
その子の百ばいも千ばいもわるい
わるい
わるい
わたしがわるい

どこかへいってしまおとおもた
でも なんぼあるいても
どこへもいくところあらへん
なんぼかんがえても
あしばっかりふるえて
なんにもかんがえられへん
わたしはどうして
あんなわるいことしたんやろ
せんせい どないしよう

皆さんは、どう感じられるでしょうか。表現こそ拙^{つたな}いものの、私が驚かされるのは、自らの内^{みずか}を見つめる目が小学校3年生のものとは思えないほどに鋭く、深いことです。そして 何よりも、素

わたしの心に・・・

直で正直で真つすぐな告白の言葉が並んでいることに、心を動かされます。現実には、私たち大人^{おとな}のほう^{ずる}がむしろ狡くて悪知恵に富み、自分可愛^{かわい}さに人をじょうずに利用するのではないのでしょうか。事をごまかし、言い訳をし、時には嘘^{うそ}までついて、真実^{まこと}を覆い隠^{かく}そうとするのではないか。自分自身の内側を奥深く覗^{のぞ}き見るとき、そう思わされています。その意味で、安子ちゃんの告白に触れるとき、私は小さな人から大切なことを教えられるように感じています。無知の中にあることに気づかない自分が、誰よりも無知だということ。傲慢^{ごうまん}に気づかない自分こそが傲慢^{ごうまん}だということ。歪^{ゆが}みを認めない自分のほうが歪んでいるということ。闇の中にいるのに それに気づかない自分が、本当の闇に包まれているということ。そして、内なる罪性に気づかない自分こそが最大の罪人だということ。つらくてきつい問題であっても、そこから目を逸^そらさず、逃げずに真つすぐ向き合った安子ちゃんの懸命さに 頭^{あたま}が下がります。

いつのときも、私たちには、しらばくれたりごまかしたりしてはならない事柄があるように思われます。聖書の語る「罪」の問題は まさに、その一つと言えるのではないのでしょうか。神の独り子 イエス・キリストがこの私たちのためにその身をさらしてたたずんでくださるのは、そこにおいてだからです。

皆さんもよく御存^{おんぞん}じの大江 健三郎^{けんざぶろう}の作品に、『燃えあがる緑の木』という3部作があります。大江さんがノーベル文学賞の受賞前後に執筆された作品ですが、その中に次のような光景が出てきます。松男^{まつお}さんという登場人物の一人が語るもので、3部作の最後を飾る言葉となっています。ギー兄^{ぎい}さんというのは、小説の主人公です。

車椅子の上の、まさに斃^{たお}れようとするギー兄^{ぎい}さんの肖像は、私に十字架の聖ヨハネの描いたイエスを思い出させたのです。そのイエス像は、全身から血をしたたらせながら、しかもその身体^{からだ}がねじ曲^まがるほどの力をこめて、自分を釘^{くぎ}付けにしている重い十字架を支えています。はっきりしているのは、これだけの十字架が倒れかかってくるとして、それを支えうる者は、そこに太い釘で打ちつけられて血をしたたらせている、胸も腕も太い男^{おとこ}しかいない、ということです。

この絵は、十字架にかけられたキリストを・・・〔向^むかって〕右上方から〔見下ろすようにして〕描くものですが、人類がこのような視点からキリストを見ることができるようになるまでに、時が必要だった・人類に時が熟してはじめてこの視点から描く肖像が現れた、と論じた人がいます。

そして、この一節^{いちせつ}に触れ、川本 三郎^{かわもと さぶろう}という評論家が「解説」で次のように記しています。

印象的なイメージがある。キリストの磔^{たっけい}刑の絵である。その絵は、十字架を〔向^むかって〕右上^{みぎうへ}の高いところから見おろす角度から描かれている。すると、吊りさげられた恰好^{かっこう}のイエスが逆に〔両腕^{りょううで}を突き上げ、拳^{こぶし}を握^{にぎ}って頭^{あたま}を傾^{かし}げ〕渾身^{こんしん}の力で十字架を支

えているように見える。傷ついた弱いイエスが、重荷を全身で支えているときにはじめて 聖なる力を帯びてくる。弱い者こそが救世主きゅうせいしゅになっていく。

イエス・キリストは「世の罪を取り除く神の小羊」として 人々の悪意まで甘んじて受け、罪ある私たちを丸ごと その身に負ってくださったのではないのでしょうか。主イエスはそのようにして、その深い赦しゆるの中に私たちを置いて、包んでくださったのではないか。十字架を背に負い、その重みを全身で担うようにしておられる御姿みすがたは、そのことを身をもって示しているように思います。私たちは、イエス・キリストのこの愛を頂いて初めて、自分自身の内なる闇を赦され、新たないのちへと導き入れられるのではないのでしょうか。

教会は、イエス・キリストのこの十字架の恵みを記念し、主の晩餐式をまもってきました。パンを裂き、葡萄酒ぶどうしゅを飲むことで、主イエスの身体からだと血とを思い起こしてきました。その主の晩餐式のテーブルを、数こそ多くはないものの、ひつぎ 柩の形にしている教会があるといます。それは、クリスチャンが明日をも知れぬ激しい迫害にさらされ、次々と命を奪われていった あのローマ時代の殉教者の柩かたどを象ったものです。迫害の嵐が吹き荒れたローマ時代、クリスチャンは殉教の仲間が葬られた地下の共同墓地に集まり、そこで礼拝をまもり続けました。「カタコンベ」と呼ばれる場所です。そして、その同じカタコンベで、交わりの食事をも分かち合ったのでした。食卓のテーブルは、先に召された兄弟姉妹たちの柩ひつぎがたでした。柩形ひつぎがたの晩餐式のテーブルは、これを象ったものです。そして、テーブルは必ず、白い布で覆います。復活の主イエスのいのちが 限りある私たちのいのちを包み込んでくれるからです。

私たちは、全身をもって支えてくださるイエス・キリストの愛で包まれています。真まことのいのちに生かしてくださる主イエスのいのちで覆われています。この恵みを感謝し、この恵みに素朴に信頼して歩んでゆきたいと思います。

〔祈り〕

愛する神様。

2000年前、この地上を歩まれた御子みこイエス・キリストの御姿みすがたを 甦よみがえらせ、その内に秘められた深く熱い思いを私たちのものとさせてください。十字架上に流され砕かれた、御子の血と体とを想います。辱はずかしめと苦しみを 人々のなすがままに甘んじて受けられた、その御業みわざの重さを想います。それがどれほどのものであったのか、私たちに分かつはるはずもありません。ただ知っているのは、それが私たちを慈しみ、私たちのすべてを今あるところから受け入れてくださるものだったということです。受けるに値しない者に下さった、大きすぎる恵みに感謝いたします。

私たちに近く伴い立ってください。私たちの目を開き、御子イエス・キリストの内にあなたの御姿を見させてください。耳を開き、聖書の御言葉みことばの内にあなたの語りかけを聴き取らせてください。心を開き、祈りの内にあなたのいのちを受け取らせてください。私たちのすべてを、あなたの真実と強

わたしの心に・・・

さで満たしてください。

私たちの主、御子イエス・キリストの御名^{みな}によって願い、お祈りいたします。

アーメン